

日本人遺族における宗教性と悲嘆、抑うつとの関連

坂口 幸弘*

サマリー

本研究の目的は、日本人遺族における宗教活動や死後観を明らかにするとともに、悲嘆や抑うつとの関連を検討することである。結果として、20～40歳代の比較的若い世代において、特定の宗教をもたず、宗教活動をしない人の割合が、上の世代に比べて相対的に大きいことが示された。死後観に関しては、各年代を通じて7割前後の遺族が肉体は死んでも魂は残ると考えており、特定の宗教をもたない遺族においても約6割がそのよう

な考えをもっていた。悲嘆や抑うつとの関連については、BGQおよびPHQ-9による評定の結果、お参りやお勤め・礼拝を「定期的にする」と回答した遺族や、死んでも魂は残るとの思いが強い遺族において、複雑性悲嘆や大うつ病性障害が疑われる人の割合が高いことが示された。死別後の適応過程における日本人の宗教性の働きを検証し、日本人遺族に対する宗教的な支援のあり方について検討することが今後の課題であるといえる。

目 的

宗教や死生観が遺族の悲嘆や健康に及ぼす影響については、必ずしも明確な結論は得られていないが、その関連性を支持する研究はいくつかみられる^{1,2)}。Smithらの研究³⁾では、死後の世界に対する強い信念をもつ人は、死について考えることを回避せず、喪失になんらかの意味を見出すことができ、適応状態が良好であった。近親者を亡くした日本人高齢者を対象としたKrauseら⁴⁾は、死後の世界を信じている人ほど、高血圧の改善が

みられたと報告している。また、教会などに定期的に、あるいは時々は出席するという人は、まったく出席しない人に比べ、ソーシャルサポートを多く得ることができ、抑うつの水準も低かったとの報告もある⁵⁾。1990年代以降、この領域に関する研究知見が蓄積されつつあるが^{1,2)}、日本人遺族を対象とした研究はきわめて少ない。そこで本研究では、日本人遺族における宗教活動や死後観を明らかにするとともに、死別後の悲嘆や抑うつとの関連を検討することを目的とする。

*関西学院大学 人間福祉学部 人間科学科 (研究代表者)

表1 宗教性に関する年代別回答分布

	～39歳	40～49歳	50～59歳	60～69歳	70～79歳	80歳～	全体
特定の宗教なし	199名 55.0%	505名 46.1%	893名 40.9%	875名 33.4%	451名 24.7%	87名 15.0%	3,010名 34.7%
あなたの宗教は何ですか？							
仏教	143名 39.5%	509名 46.5%	1,128名 51.6%	1,525名 58.3%	1,184名 64.9%	438名 75.6%	4,927名 56.9%
キリスト教	9名 2.5%	28名 2.6%	38名 1.7%	63名 2.4%	57名 3.1%	18名 3.1%	213名 2.5%
神道	5名 1.4%	24名 2.2%	51名 2.3%	70名 2.7%	75名 4.1%	20名 3.5%	245名 2.8%
その他	6名 1.7%	29名 2.6%	76名 3.5%	85名 3.2%	56名 3.1%	16名 2.8%	268名 3.1%
定期的に 寺院・神社・教会などに、お参りやお勤め・礼拝に行きますか？	35名 9.7%	208名 19.0%	432名 19.8%	659名 25.0%	562名 30.3%	184名 31.6%	2,080名 23.9%
ときどきする	129名 35.6%	419名 38.2%	998名 45.7%	1,197名 45.4%	848名 45.7%	261名 44.8%	3,852名 44.2%
ほとんどしない	133名 36.7%	332名 30.3%	545名 25.0%	560名 21.2%	316名 17.0%	102名 17.5%	1,988名 22.8%
全くしない	65名 18.0%	138名 12.6%	207名 9.5%	223名 8.5%	128名 6.9%	36名 6.2%	797名 9.1%
た と え 肉 体 は 死 ん で も 魂 は 残 る と 思 い ま す か？	109名 30.0%	321名 29.7%	656名 30.5%	846名 32.4%	685名 37.5%	264名 45.8%	2,881名 33.5%
	136名 37.5%	424名 39.3%	847名 39.3%	863名 33.1%	587名 32.1%	174名 30.2%	3,031名 35.2%
	89名 24.5%	234名 21.7%	456名 21.2%	597名 22.9%	373名 20.4%	93名 16.1%	1,842名 21.4%
	29名 8.0%	101名 9.4%	195名 9.1%	304名 11.6%	182名 10.0%	46名 8.0%	857名 10.0%

結果

1) 宗教、宗教活動、死後観に関する回答分布

年代別および全体での回答結果を表1に示す。信仰している宗教に関して、全体では「仏教」が56.9%と最も多く、「特定の宗教なし」が34.7%であった。年代別では、「特定の宗教なし」との回答は若い年代ほど割合が高く、30歳代以下では55.0%と最も多かった。

宗教活動について、「寺院・神社・教会などに、お参りやお勤め・礼拝に行きますか」と尋ねたところ、全体では「定期的にする」「時々する」を合わせて回答者の68.1%がなんらかの宗教活動を行っていた。年代別では、30歳代以下および40歳代で、「定期的にする」との回答割合は低く、「全くしない」との回答割合が高かった。

死後観について、「たとえ肉体は死んでも魂は残ると思いますか」と尋ねたところ、全体では「そう思う」「ややそう思う」を合わせて回答者の68.7%が死後も魂が残ることを信じていた。年代別では70歳代および80歳代以上において「そう思う」との回答が多くみられた。

2) 特定の宗教の有無と宗教活動および死後観の関連

宗教活動に関しては、特定の宗教を有する遺族の方が、「定期的にする」との回答が多いものの、特定の宗教をもたない遺族においても48.7%が宗教活動を行っていた(表2)。一方、死後観については、特定の宗教を有する遺族のうち72.9%が魂の存在を信じていたのに対し、特定の宗教をもたない遺族では60.8%であった。

3) 宗教活動と死後観の関連

宗教活動と死後観には関連性が認められ、寺院・神社・教会などへのお参りやお勤め・礼拝を定期的にする遺族ほど、死んでも魂は残るとの信念を強くもっている割合が高いことが示された(図1)。

表2 特定の宗教の有無別での宗教活動および死後観の回答分布

		特定の宗教なし		特定の宗教あり	
寺院・神社・教会などに、お参りやお勤め・礼拝に行きますか？	定期的にする	258名	8.6%	1,820名	32.1%
	ときどきする	1,206名	40.1%	2,628名	46.4%
	ほとんどしない	1,015名	33.7%	961名	17.0%
	全くしない	531名	17.6%	256名	4.5%
たとえ肉体は死んでも魂は残ると思えますか？	そう思う	731名	24.6%	2,137名	38.3%
	ややそう思う	1,078名	36.2%	1,935名	34.6%
	あまりそう思わない	743名	25.0%	1,090名	19.5%
	そう思わない	424名	14.2%	424名	7.6%

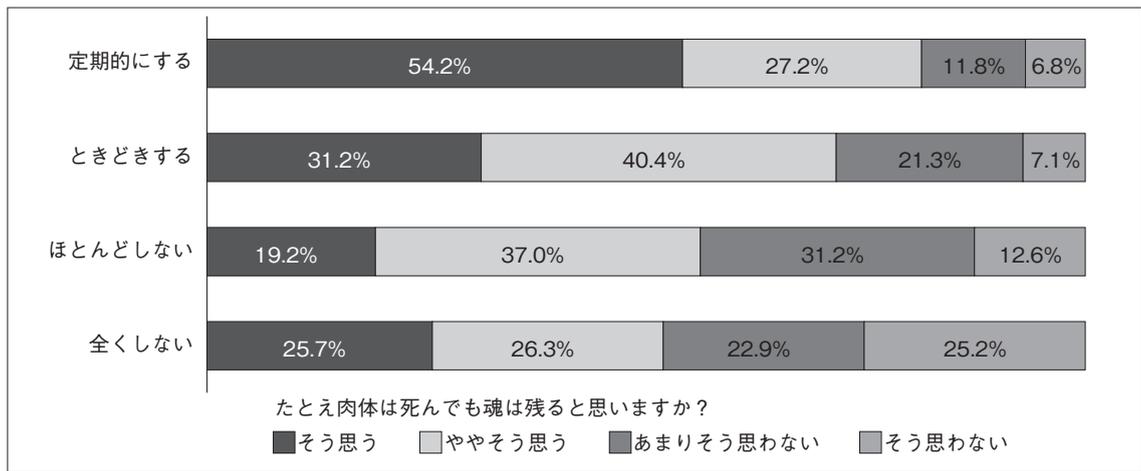


図1 宗教活動の頻度別での死後観の回答分布

4) 宗教活動および死後観と悲嘆、抑うつとの関連

悲嘆の測定には、簡易版複雑性悲嘆質問票BGQ（5項目、3件法）を用いた。10点満点中、8点以上であれば「複雑性悲嘆の可能性が高い」と評価される。一方、抑うつの測定にはPHQ-9日本語版（9項目、4件法）を用いた。得点範囲は0～27点であり、10点以上であれば大うつ病性障害が疑われると判断される。回答者全体において、複雑性悲嘆の可能性が高いと評定された遺族は13.9%であり、大うつ病性障害が疑われると判断された遺族は17.2%であった。

宗教活動の頻度別、死後観の回答別でのBGQ

およびPHQ-9の評定結果は図2の通りである。お参りやお勤め・礼拝を「定期的にする」と回答した遺族や、死んでも魂は残るとの信念が強い遺族において、複雑性悲嘆や大うつ病性障害が疑われる人の割合が高いことが示された。

考察

今回、日本人遺族の宗教性における年代差が明らかとなり、20～40歳代の比較的若い世代において、特定の宗教をもたず、宗教活動をしない人の割合が、上の世代に比べて相対的に大きいことが示された。これらの結果は、若い世代におけるいわゆる「宗教離れ」を示唆するものといえる。

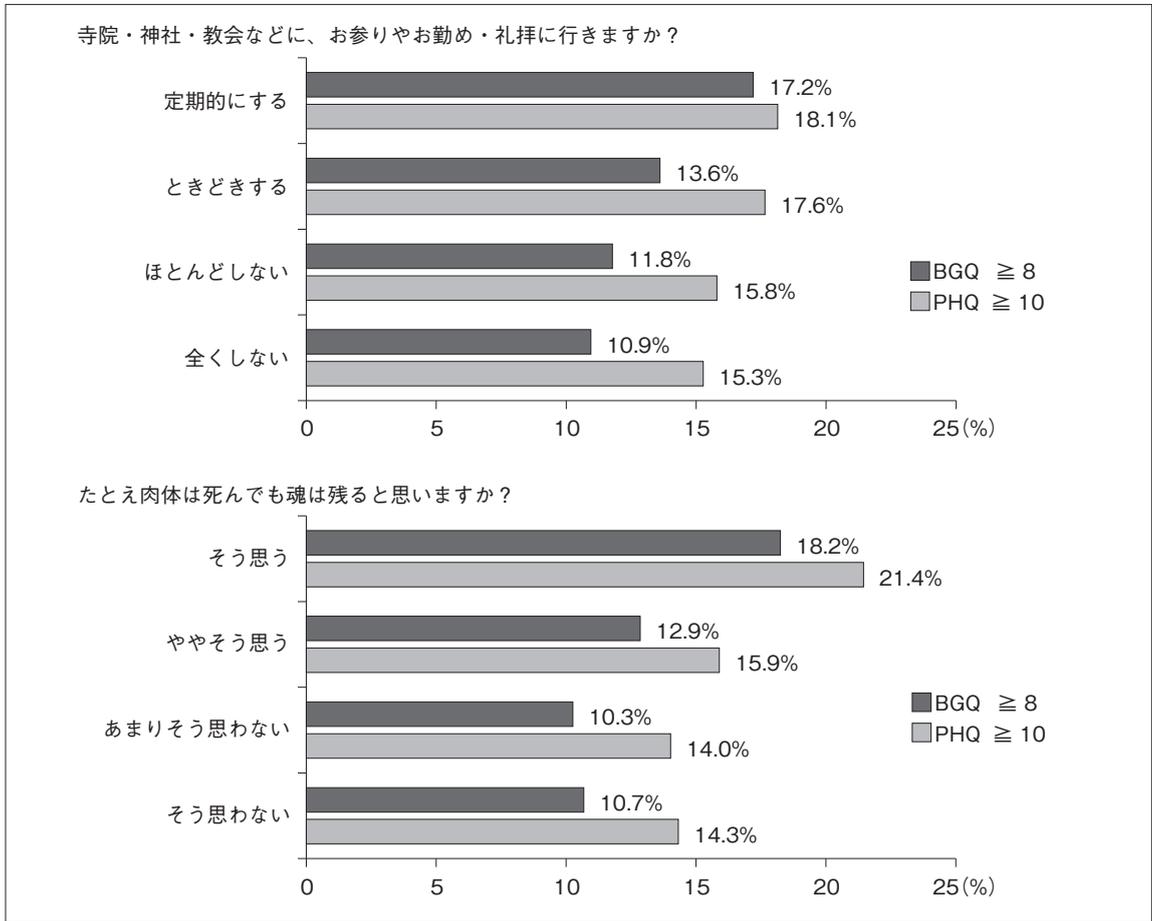


図2 宗教活動の頻度別および死後観の回答別のBGQとPHQの評定

ただ、今回の結果が世代差に帰するものであるのか、年齢に基づく発達段階や経験によるものであるのかは、今後の長期的な調査が必要である。一方で、死後観については、各年代を通じて7割前後の遺族が肉体は死んでも魂は残ると考えており、特定の宗教をもたない遺族においても約6割がそのような考えをもっていた。したがって、このような死後観は、必ずしも特定の宗教と結びついたものではなく、多くの日本人に共有される宗教的な信念の1つであり、世代を超えて受け継がれている可能性が考えられる。

宗教と遺族の悲嘆や抑うつとの関連については、いくつかの先行研究において宗教活動や死後

観が死別後の適応過程に肯定的な影響を及ぼすと報告されている。今回の調査では、これらの報告を支持する結果は得られず、逆に宗教活動に熱心な遺族や、死んでも魂は残るとの信念をもつ遺族の方が、複雑性悲嘆や大うつ病性障害が疑われる人の割合が高いことが示された。ただ、今回は1時点での横断調査であるため、変数間の因果関係について論じることは難しく、宗教活動や死後観が死別後の適応過程を阻害するとの解釈は早計である。遺族によっては、死別の衝撃が大きかったがゆえに、宗教活動に積極的になったり、死んでも魂は残ると信じようとした可能性もある。すなわち、今回の結果は、日本人遺族におけ

る宗教的な対処方略を表していると解釈することもできるであろう。

東日本大震災後、あらためて宗教の役割が問われている昨今、本研究では日本人遺族における宗教活動や死後観の一端を示すことができた。今後、日本人の宗教性が、死別後の適応過程において、どのような働きを有しているのかを明らかにするとともに、遺族に対する宗教的な支援のあり方について検討することが課題であるといえる。

文 献

- 1) Becker G, Xander CJ, Blum HE, et al. Do religious or spiritual beliefs influence bereavement? A systematic review. *Palliat Med* 2007 ; 21 (3) : 207-217.
- 2) Hays JC, Hendrix CC. The role of religion in bereavement. In : MS Stroebe, RO Hansson, H Schut, W Stroebe (Eds.), *Handbook of Bereavement Research and Practice : Advances in Theory and Intervention*. American Psychological Association, Washington, DC, 2008 ; 327-348.
- 3) Smith PC, Range LM, Ulmer A. Belief in afterlife as a buffer in suicidal and other bereavement. *Omega* 1992 ; 24 : 217-225.
- 4) Krause N, Liang J, Shaw B, et al. Religion, death of a loved one, and hypertension among older adults in Japan. *J Gerontol B Psychol Sci Soc Sci* 2002 ; 57 : 96-107.
- 5) Nolen-Hoeksema S, Larson J. *Coping with Loss*. Lawrence Erlbaum Associates. London, 1999.

〔付帯研究担当者〕

森田達也（聖隷三方原病院 緩和支援診療科）